

昭和精神  
の  
風貌

昭和の  
精神の  
風貌

桶谷秀昭

河出書房新社

## 昭和精神の風貌

一九九三年一月二日 初版発行  
一九九三年四月七日 再版発行

著者 桶谷秀昭

装丁 東 幸見

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三―一二

電話 営業〇三―三四〇四―一二〇一  
編集〇三―三四〇四―八六一一

振替口座(東京) 〇―一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたしません

定価はカバー・帯に表示してあります

© 1993 Printed in Japan

ISBN 4-309-00810-0

桶谷秀昭(おけたにひであき)

昭和七年、東京生。一橋大学社会学部卒。左記の主要著書がある。

『近代の奈落』(國文社)

『夏目漱石論』(河出書房新社)

『中世のころ』(小澤書店)

『ドストエフスキイ』(河出書房新社)

『第七回平林たい子文学賞』

『天心・鑑三・荷風』(小澤書店)

『保田與重郎』(新潮社・第三五回

藝術選奨)

『二葉亭四迷と明治日本』

『昭和精神史』(以上、文藝春秋・

第四六回毎日出版文化賞)

目次

|       |     |
|-------|-----|
| 徳富蘇峰  | 5   |
| 西田幾多郎 | 26  |
| 永井荷風  | 47  |
| 林 房雄  | 68  |
| 武田泰淳  | 88  |
| 竹内 好  | 109 |
| 大熊信行  | 129 |
| 亀井勝一郎 | 149 |
| 伊東静雄  | 168 |
| 村上一郎  | 190 |
| あとがき  | 210 |



昭和精神の風貌



## 徳富蘇峰

一

現在、世の中に幅をきかしてゐる者は馬鹿か便乗主義者である。野口米次郎、徳富蘇峰、久米正雄その他がある。(清澤冽『暗黒日記』昭和十八年六月十九日)

清澤冽は親米的な自由主義者であつたから、大東亜戦争下の言論抑圧に鬱屈した心情を右の私的な日記に洩らしてゐるのも不思議ではない。ちなみに、徳富蘇峰は、昭和十七年に設立された日本文学報国会と大日本言論報国会の会長であり、八十歳の高齢ながら、毎日新聞に大東亜戦争の大義を鼓舞する論説を盛んに書いてゐた。

清澤冽が「馬鹿か便乗主義者」のどちらかだといつたとき、おそらく蘇峰を「馬鹿」とは思つてをらず「便乗主義者」と思つてゐたにちがひない。清澤冽の眼には、世界の情勢や欧米の国情、知識にくらい、狂信的な国粹主義者は「馬鹿」にみえたにちがひないが、蘇峰はそれとは別のタ



イブの、もしも大東亜戦争下でなかつたとしたら、自由主義的なナショナリストの部類に入る老知識人であつた。それ故にこそ「便乗主義者」にみえたのである。清澤列の日記に蘇峰にたいするほとんどの憎悪といつていい攻撃がしきりにくりかへされるのは、それがおのれに近き者への憎しみであるかもしれないといふ推測を抱かせさへもする。

徳富蘇峰とは何者であつたか。その頃、私は小学校から中学へ入る年頃であつたが、あるとき父親が、「蘇峰は『東洋の文士』といはれてゐる」といつたのをおぼえてゐる。

父親は蘇峰の愛読者でも何でもなく、文豪蘆花の兄としての蘇峰の著名を知つてゐる一庶民にすぎない。『東洋の文士』といふ言葉をいつまでもおぼえてゐるのは、それを聞いたときに或る強い印象を受けたからである。

だいたい、昭和二十年以前の普通の家庭で、『文士』といへば三文文士を聯想する、忌避すべき蔑称であつた。世の正業に就けない道楽者と大差なかつた。私の家も例外ではなかつたが、父親が『東洋の文士』といふ口調に尊敬の念をこめてゐるのが聞きとられて、強い印象を受けたのである。

どうやら徳富蘇峰は、文士でもなみの文士ではないらしい。日本の国運を背負ひ、アジアの経綸を考へる器量雄大な文士といふことか……。

それにしても蘇峰の人氣は動かしがたいものであつた。昭和十四年発行の『昭和国民読本』（毎日新聞社）は発売三か月で五十万部売れたといふ。今日、よんであまりおもしろい本ではない。当時の高度国防国家の国是を、明治以降の歴史的回想とからませて、手際よく解説した啓蒙書で、

まづは書名通りの内容である。頁の組み体裁も当時の尋常国史教科書と何やら似てゐる。

とはいへ、この本に蘇峰らしい特色は歴然としてゐて、それを二つの引用によつて指摘してみよう。

孝明天皇の御宇に於て、国家総動員提唱者とも云ふ可き徳川齊昭、島津齊彬、藤田東湖、佐久間象山、横井小楠、橋本景岳、吉田松陰の夢は、五十余年の後に於て、其の全部でなきまでも、その輪郭だけは、実現せらるゝに到つた。(「第一、明治時代」傍点、引用者)

昭和十四年の新体制、国家総動員の動きが、明治維新の原動力となつた幕末変革の動きに重ね合はされて、意識されてゐる。

注意が惹かれるのは、文中に列举されてゐる変革者たちが、みな明治新政府の実現をみないで中途に斃れたか、新時代に生き残つたとしても夢裏切られて失意の生涯を了へねばならなかつた人びとであることである。就中、横井小楠は蘇峰の郷里熊本の開明的な儒者、横井の実学は徳富家の家学であつた。

「第二の維新」は、明治二十年代、蘇峰青年期の理想であつた。明治藩閥政府は、「第二の維新」によつて変革されねばならないといふのである。そして維新変革者の夢が、「五十余年の後」に輪郭だけは実現せられた、といふとき、蘇峰は日露戦争の勝利によつて、国民国家として完全独立を達成した日本をいつてゐる。

だが、完全独立が実現せられたときから、明治国家は空洞化しはじめたのである。日露戦後につづく大正期は、第一次大戦によつて成金景氣を享受しながら、国是を失ひ、国家的総意において空洞化が深まる幻滅の時代であつた。

蘇峰が深刻な危機感に見舞はれたことは、『時務一家言』（大正二年）や『大戦後の世界と日本』（大正九年）といった著作にあきららかである。このままでいつたら、日本は亡びるのではないか。日本は「死中に活」を求めねばならない。

そこで、『昭和国民読本』からもうひとつの引用。

世界大戦の終結以来、満州事変の発生まで、即ち大正七年より昭和六年までの足掛け十四年間は、日本に取りては、少くとも世界的には、霜枯れの時代であつた。未だ全く暗黒時代と云はざるも、曇天時代であつた。日本が欧米諸国から袋叩きに罹<sup>か</sup>たるを傍觀したる支那が、如何で其の虚隙に乗ぜずして止む可き。英米人の頤使<sup>いし</sup>に詭随盲従したる我が当局者は、やがては支那人から勝手次第に取り扱はれ、その極三十七八年戦役、二十億円の金と、十万人の血と骨とを以て購<sup>か</sup>うたる満州に於ける權益も、殆んど全く支那人の爲めに蹂躪せられ、最早此上は日本人は手鞆一個にて、満州から遁<sup>た</sup>げ還るの他は無<sup>な</sup>つた。

而して其の回轉期が、実に昭和六年九月十八日、奉天附近、柳條溝<sup>りゅうじょうこう</sup>の事件であつた。我等は今更此の事件が如何にして出来上りたるかを詮鑿する必要が無い。来る可きものが來つたのである。我等は寧ろ之を以て天祐と信ずるものである。（第三十六、満州事変）

一見するに、当時の日本国内の輿論を手際よく代弁してゐる文章に思はれる。しかし、蘇峰の七十七年の人生と、日本の国運につねに密着した言論活動の歴史を考へるなら、これは彼の掛値なしの本音でもあつたにちがひない。

「満州」が新興中国と不可分の領土であるか否かといふ議論は、ワシントン会議では問題がむづかしいので、棚上げになつたが、昭和六年柳条湖での日中衝突が起ると、アメリカ國務長官スチムソンは、いはゆるスチムソン・ドクトリンを掲げて、日本を非難した。

それは、ワシントン会議における九国条約と四国条約にもとづいて、中国の「領土保全、主權尊重」、商工業、交易の「門戸解放と機會均等」を、日本が侵害したといふ理由によつてゐる。

イギリスが主導する國際聯盟はアメリカほど教条的ではないが、対日非難に傾いてゐる。

蘇峰は、狭義の満州事変、つまり柳条湖の衝突が、石原莞爾らによる関東軍の武力謀略であることを知つてゐたにちがひない。それを知りつつ、あへて「天祐」といひきるのは、この局地的衝突が、日中の衝突といふより、アメリカの極東戦略の中になんじがらめになつてゐた日本が、その突破口をひらいた、といふ脈絡でとらへてゐるからである。

排日ナショナリズムに湧き立つ中国は、ワシントン体制を利用し、いはば夷を以て夷を征しようとしたにすぎない。

「満州」とは蘇峰の年代の日本人にとつて、血と涙の記憶のともなふ土地であつた。

日清戦後、独仏露三国の干渉による遼東還付。「臥薪嘗胆」の十年後に、ロシアを「満州」か

ら漸く放逐して、関東州と南滿鐵道の権利を得た。清朝末期、漢民族からは外夷の地とみなされ、治安は乱れ馬賊の跳梁する「滿州」に、近代設備をもたらし、治安を確立し、そのために山東省から多数の中国人移住者をみるやうになつた。日清戦争当時四千万人だつた内地人口が、やがて一億にならうとしてゐる。人口増加と食糧問題を解決するためにも「滿州」は日本の「生命線」であつた。

## 二

大東亜戦争の宣戦の詔書の末段は、次のやうな文章である。

……事既ニ此ニ至ル、帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為、蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナ  
リ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ……

日清、日露、対米英の三つの宣戦詔書をよみくらべると、その文章構成に一定の型があつて、起承転結の「転」の部分、開戦のやむなきに至つた経過を述べる部分を別にすれば、ほかは措辞において同工異曲である。

ただ、措辞の上で、日清、日露と対米英戦がちがふのは、「大日本（帝）国皇帝」（日清、日露）が、「大日本帝国天皇」となつてゐることである。「エムペラア」に翻訳されることを予想し

た「皇帝」を捨て、翻訳不可能な「天皇」を採用した。

このことは、「承」の部分で、「凡そ国際条規の範圍に於て一切の手段を尽し」、あるいは「文明を平和に求め」といつた、日清、日露宣戦において、必ず入つてゐた言葉が、対米英戦では捨てられたことに見合つてゐる。もはや「国際条規」や「文明」といつた欧米列強の大義名分に拘束されないといふ決意である。いふまでもなく、「文明」は「シヴィライゼーション」の翻訳語だからである。

そのかほりに「億兆一心国家の総力を挙げ」といふ総力戦の思想が主張された。また、「結」の部分で、「速に平和を永遠に克復し」（日清、日露）が「東亜永遠の平和の確立」に変へられた。平和一般ではなく、あくまで東アジア文明圏の平和に限定されてゐる。米英との戦争はをはることを予想してゐない含意がよみとれる。

ところで、この「結」の部分に、いままでの宣戦詔書になかつた、まったく新しい一句が登場してくる。すなはち、

「皇祖皇宗の神靈上に在り」

がそれで、この一句は原案になかつたのをあとから加へたのである。そしてその加筆者が、ほかでもない徳富蘇峰であつた。

東條英機首相が開戦の直前に、副官の赤松貞雄大佐を蘇峰のところへ遣り、宣戦の詔勅の校閲を依頼したからである。

戦後に、この一句をとらへて、開戦の主体が天皇でも国民でもなく、「皇祖皇宗の神靈」とい

ふ、いはば日本的な無に溶解してゆく異様な表現であるといふ指摘がされた。

蘇峰は何を考へてこの一句を加筆したのであらうか。

彼は昭和のはじめから、日本の国家の中心が皇室にあることを熱烈に説きつづけたことは事実である。彼が皇室の崇拜者であつたことは疑ひやうがない。

しかし彼はまた、近代国家の否定者であつたことは一度もなく、皇室はあくまでも近代国家日本あつての皇室であつた。近代国家と皇室は一体であり、蘇峰はそれを疑つたことはない。神がかりになるには、あまりにも現実主義者である。受けた教育も実学の傾向の強い儒学であり、その西欧的教養は、マンチェスター派の自由主義的、功利主義的社会、経済思想である。

「皇祖玄宗の神靈上に在り」とは、蘇峰の危機感から発した祈りであつたと思はれる。彼が戦争の見透しについて楽観的であつたとは思はれない。つまり勝てると思つてゐなかつたであらう。もつとも、開戦内閣の東條首相をはじめとする閣僚のだれひとり勝てると思つてゐた者はゐない。

昭和十七年六月一日の「毎日新聞」に、蘇峰は「百年戦争」と題する論説を書いてゐる。ミッドウェイ海戦の直前、緒戦の連戦連勝に国内が湧き立つてゐる空気にたいして、警告の意図がうかがへる。南方占領地の住民の協力を得て、戦略資源を確保し、百年持久戦にもちこんで、米国の戦意喪失を待つ以外に道はない、といふのである。

かういふ大雑把な見透しは、開戦時閣僚も五十歩百歩に抱いてゐた希望的観測であつた。ただ、蘇峰の胸の中にあつたのは、彼が青年のときに夢みた近代日本国家の蘇生への想ひであつたかも

しれない。

開戦のとき、蘇峰より一世代以上も年下の知識人たちは、河上徹太郎の言葉によれば、「知的戦慄」を感じた。おそらく、蘇峰はさういふ体験を共有しなかつたであらう。来るべきものが来たといふ思ひはおなじでも、その背後に曳きずつてゐる歴史的体験の幅がちがつてゐる。つまり蘇峰の体験の原点には、明治国家が昨日のことのやうに息づいてゐた。

されば我等一億の皇民に於いては、今回の事件を以つて、飢ゑたる時に食を攝り、寒き時に衣を重ねると同様の心持を以つて、所謂の平常心を以つて、此の非常時に当らねばならぬ。平常心と云ふは、日本国民、即ち皇民の祖先以来持ち来り、伝へ来り、発育し来りたる、其心である。即ち日本精神である。（『宣戦の大詔』）

昭和十七年一月二十七日より稿を起し、二月八日に脱稿したといふ小冊子で、その序文によれば、藤田東湖の『弘道館記述義』にならつて、宣戦の大詔の大義を述べたものである。八十歳の老人が二週間足らずで二百頁の本を書いたわけで、彼の速筆と健筆は衰へを知らないかのやうである。

もつとも内容は、『昭和一新論』（昭和二年）以来、くりかへして書いてきたことを出ない。蘇峰にすればそれでよかつた。何も新しいことをいふ必要はない。「平常心」の持続こそが彼における戦争だといふのである。



ただ、蘇峰の「平常心」は、昭和は一新されねばならぬといふ當為とひとつであつた。『宣戦の大詔』などは彼にしては平談俗語の口調で書かれてゐるが、『昭和一新論』の文体は、當為の方が先行してゐるため、明治人蘇峰のクラシックないひまはしが露骨である。

昭和二年一月二日、草莽の微臣、徳富猪一郎、湘南野史亭に於て、芙蓉千古の白雪に対し、茲に『昭和一新論』の稿を始め。微臣、孝明天皇の御宇、文久三癸亥の歳正月廿五日、鎮西火国の一隅に生れ、明治時代、大正時代を経て、茲に昭和新時代の民となる。身既に三朝の聖沢に浴し、齡已に六十五。少小家字を承け、志は天下に存したるも、未だ寸效の以て、聖明を裨補したる所が無い。去歲臘末、端なくも国家の大故（大正天皇崩御を指す——引用者）に遭ひ、御代爰に改まり、歳も亦改まる。官吏官務あり、軍人軍務に服す。乃ち農、工、商の徒、皆各其業に服せざるもの無し。微臣は一枝の筆を以て、世に立つ既に五十年に垂んとす。茲に本文を草する、亦微臣の職責を尽し、敢て海岳限りなき国恩に酬いんと欲するの意に外ならない。国恩と云ふは、畢竟皇恩である。歴代聖天子の恩である。我等の眼中には、君と国とは同一である。日本国には皇室ありて、国家あり。国家ありて、皇室あり。皇室を外にしては、国家の存在す可き道理が無い。

この文章で、蘇峰は、昭和を明治国家の墮勢形態から、新しい「明治国家」に生まれ変わる時代たらしめたいと願つてゐるのである。